

イントロダクション

<授業のポイント>

初回にあたる今週は、授業のために必要な各種設定を行い、授業の進め方についての説明をお聞きいただきます。また協力して発表を行うグループの編成も行いますので、来週からの授業に備え、話し合いをしておいてください。

1. コンピュータの設定 （別に配布するマニュアルを参照）

- ・ネットワーク接続設定
- ・Google アカウント設定
- ・Java の設定

2. 授業で使用するサービス等について （別に配布するマニュアルを参照）

- ・大阪大学授業支援システム WebCT
- ・Google (Gmail、Document)

3. 授業の進め方について （資料1）

- ・授業のテーマや進め方、成績評価などについて解説します
- ・購読用のテキストを配布します

4. グループ編成と打ち合わせ （資料2）

- ・簡単な自己診断アンケート（資料2）をお渡ししますので、必要な項目にご記入ください
- ・アンケートをもとに、クラスをAとBの2グループに分けます
- ・次週からの作業の準備のため、グループで打ち合わせをします（リーダーの選出、連絡先の交換、Google のグループメンバー設定など）

5. 自己紹介用の資料作成

- ・次週実施予定の自己紹介のための、発表用資料を作成します
- ・Google Document のプレゼンテーション機能を使いながら、各自資料を作ります
- ・ちなみに自己紹介は英語でやっていただいても構いません（強制ではない）

6. その他 （資料3、資料4）

- ・次週までにやっておくべきことを指示します（資料3）
- ・時間があれば、資料を読み、ディスカッションを行います（資料4）
——資料は最近ニュースになっているウォールストリートのデモについての記事。英文を素早く読み、要点を掴み取る練習をしましょう。

資料1 授業の進め方について

1. 授業の目的

異文化理解科目（英語）B は、**英語とコンピュータを活用した文化研究のノウハウを学ぶ**ことを目的とする授業です。英語を正確に読む練習が中心ですが、単に受け身の学習ではなく、英語を使って必要な情報を調べ、リサーチで得た情報を分析・編集し、さらに英語のレポートとしてまとめて発信するなど、**能動的に英語を使いこなすうえでの基礎となるスキルの習得**が主な目的です。ディスカッションやグループでの作業なども取り入れますので、積極的に参加し、受講生同士の親睦も深めていただければと思います。

2. 授業のテーマ

本年度の異文化理解科目では、「**グローバリゼーション**」と「**メディア・スタディーズ**」をサブテーマに設定しています。簡単に言えば、世界が複雑につながりあっている状況を、各種メディアがどのように表現しているのかを考えることで、現代における文化研究のあり方についての理解を深め、それを仕事や学業に活かしていくということです。本年度第一期の授業では、グローバリゼーション研究（global studies）とメディア研究（media studies）の入門書を読み、基礎的な概念を押さえました。そのおさらいは授業の中で随時行いますが、今期の授業ではもう少し具体的な事例に即して、グローバリゼーションとメディアについての理解を深めていきたいと思います。今回は主に「食」に関する事例についての資料を読みながら、リサーチのテーマを抽出していきます。

授業全体としては、「**interconnectedness**」（相互につながりあっていること）というヴィジョンを常に意識しながら、英語圏の諸文化、またそれらの文化と日本の間になどのようなつながりがあるのかを調べていきます。個々の文化や個別の事象について調べる際であっても、それらは決して単独で存在しているわけではなく、常にそれ以外のものとの関係の中に置かれています。そうしたつながり合いを踏まえて、そもそも現代において「異文化を理解する」とはどういうことなのかを、改めてじっくり考えてみましょう。

3. 成績評価

異文化理解科目は大阪大学の正規の授業ですので、修了時には大学から単位が発行されます。それに先立って受講生の皆さんそれぞれの成績評価を行います。その評価基準は以下の通りです。

- ・平常点（出席、ディスカッションへの参加、課題・発表） 50%
- ・期末レポート（英語で作成し、電子ファイルとして提出） 50%

これを合計し、100点満点に換算して60点以上が及第点です。出席に関しては、**お仕事の都合などで欠席・遅刻される場合は必ず講師までご連絡ください**。事前に連絡があり、かつ正当な理由があると認められる場合は、欠席扱いとはしません。英語力やコンピュータ関連の技能には個人差がありますので、あくまでどれくらい努力したか、**最初と比べて相対的にどれくらい上達したかを個別に判定し**、成績評価に反映させます。したがって、「出来ない」「自信がない」「間違えた」などと気にする必要はありません。まずやってみて、失敗し、ゆっくり苦手を克服すればよいのです。

4. 各週の授業内容

各週の授業は、講師による解説を交えた**英文読解**と、受講生の皆さんによる**プレゼンテーション**を中心に進めていきます。

<授業内容>

- **英文読解**——お渡しした資料を読み、内容や英語について確認します。質問やコメントを出していただき、それについてクラス全体で意見を交わしながら考えていきます。また関連する日本語の資料なども読み、さらに映像資料などを見ることもあります。
- **グループ・プレゼンテーション**——あらかじめ設定された題材について調べ、その結果を報告していただきます。発表は基本的に**日本語**で行います。またプレゼンテーション用ソフトを使用して、**発表用の資料も用意**してください。その資料は発表後に講師に提出していただき、クラス全員が閲覧できるようにします。
- **個人プレゼンテーション**——授業の内容を踏まえ、受講生それぞれが決めたテーマにしたがってリサーチを行い、その結果を発表していただきます。**授業期間中に必ず一度は個人プレゼンテーションを行うことが**、受講するうえでの義務ですので、早めに準備を始めておいてください。なお個人プレゼンテーションは**全て英語**を用い、コンピュータで作成した**プレゼン用資料**を使っています。使用した資料は発表後に講師に提出してください。許可があれば、クラスの皆さんにも見ていただけるようにします。
- **レポート作成・提出**——授業が全て終了した後一定期間内に、期末レポートを提出していただきます。形式は自由ですが、**英語で作成**することと、**電子ファイルにまとめてメールなどで提出**することがルールですので、入念に準備を行ってください。内容・テーマも自由ですが、これまではほぼ全員の方が、授業中に行った個人プレゼンテーションをもとに期末レポートを作成されています。授業期間の後半に、レポートと個人プレゼンテーションのテーマを考えていただく時間を設けますので、普段からトピックを探しておいてください。
- **音読・発音練習**——プレゼンテーションのための準備として、時間が許す限り英文の音読や発音練習も行っていく予定です。必ずしも「ネイティブ」のように話せなくても不便はありませんが、できるだけ英語らしい発音に近づける努力は必要です。授業では、日頃から、そして授業が全て終わった後も独学で練習を続けていただけるように、英語発音の基本的なメカニズムや日本人英語学習者として知っておくと役に立つコツを紹介していきます。

5. 授業で使用するもの

主なテキストは、随時プリントをお渡し、同じものを **WebCT** からダウンロードできるようにします。今回は購読用にやや長めの英文テキストをお配りしますが、それらは書籍からコピーしたものです（電子化していないので、**WebCT** には掲載しない）。授業には、筆記用具や辞書類（電子辞書など）をお持ちください。また発音練習用にイヤホンもあるとよいでしょう。コンピュータは主にプレゼンテーションとその準備のために使いますが、その場で調べ物をしたり、メールを書いたり、さらに発音練習したりという用途もありますので、持ち込みまたは貸出しでひとり一台手元に置いておくようにしてください。**WebCT** は主として資料配布と発音練習のために使用します。プレゼンテーションには、**Google** のサービスを使用します。また講師への連絡や課題提出などは、**Gmail** をご利用ください。

資料2 グループ編成と打ち合わせ

グループ編成のための参考データとしますので、以下の質問に自己診断でお答えください。回答は成績評価に関係ありませんので、正直にお答えください。

各設問の後の1～3のうち当てはまるものを選び、その数字を右のボックスに記入してください。最後に全10問の合計点をいちばん下のボックスに書き込んでください。記入済みの用紙はいったん回収します。末尾にお名前と、授業で用いるGmailのアドレスをご記入ください。

Q1: 英語は得意な方?	1. 苦手	2. 普通	3. 得意	点
Q2: 普段の生活で英語を使う?	1. 使わない	2. たまに使う	3. よく使う	点
Q3: 英語の文章を読むのは好き?	1. できれば読みたくない	2. 必要があれば読む	3. 進んで読む方だ	点
Q4: 英語で文章を書くのは好き?	1. あまり書きたくない	2. 必要なら書く	3. どんどん書いてみたい	点
Q5: 英語で会話やスピーチをしてみたい?	1. したくない	2. 必要ならしてもいい	3. 積極的にトライしたい	点
Q6: コンピュータには詳しい?	1. 全く訳が分からない	2. 特に不自由なく使える	3. かなり詳しい	点
Q7: 普段の生活でコンピュータを使う?	1. たまに起動する	2. 用があれば使う	3. 用がなくても触っている	点
Q8: プレゼンテーション・ソフト (Power Point など) を使ったことがある?	1. 一度もない	2. 何度か使った	3. しょっちゅう使う	点
Q9: ネットを通じて人と交流するのが好き?	1. そのような経験はない	2. 付き合い程度なら	3. ネットが主な交流の場	点
Q10: 他の人と協力して作業するのは好き?	1. ひとりでやりたい	2. 気の合う相手なら OK	3. 仲間が多いほど良い	点
				合計 点

氏名 _____

授業用 Gmail アドレス : _____ @gmail.com

資料3 その他

<次週までにやっておくこと>

●自己紹介の準備

次週の授業はじめに、受講生の皆さんに自己紹介をしていただきます。自己紹介は日本語でも英語でも良いですが、一人あたり**5分程度**に収まるようにしてください(コンピュータのセッティングも含む)。発表の際には、Google Document のプレゼンテーション機能やその他普段使っておられるプレゼンテーションソフトを用いて、教室の前のスクリーンに資料を表示します。簡単なもので結構ですので、あらかじめ資料を作っておいてください。もし可能でしたら、作成した資料のデータをメールで講師に送るか、あるいは Google であれば共有設定をして講師にも閲覧できるようにしておいてください。

●購読用資料を読んでおく

本日、最初の購読用資料をお渡ししています。

Tom Standage, *A History of the World in 6 Glasses* からの抜粋

これらの資料は授業で数回に分けて読み進めていきます。指定された範囲を読み、よく分らない箇所、気になる箇所をチェックし、質問やコメントができるようにしておいてください。

次週までに読んでおくのは、**250 ページ～255 ページ**です。

最初は少し大変かもしれませんが、多少文章の意味が呑み込めなくても、大まかな話の流れを捉えるようにしてみてください。

●グループ発表の準備

購読用資料の中の一節を課題として割り当てますので、グループごとにその内容をまとめ、クラスの前で解説していただきます。発表の形式はお任せしますが、

- 1) プレゼンテーション資料をパソコンを使って作成し前のスクリーンに表示する
- 2) 原文の重要な箇所を引用するなどテキストに即して説明する
- 3) メンバー全員が貢献できるように役割を分担する

の三点を守ってください。独自に調べたデータを盛り込んでいただいても結構です。また説明は基本的に日本語で行います。

今回課題として指定するのは、以下の箇所です。

263 ページ～265 ページの、“Globalization by the Bottle” のセクション

前半と後半に分け、それぞれのグループがどちらかを担当する

- 1) 出だしの “As well as...” から、第二段落終わりの “*Business Week magazine*” まで
- 2) 第三段落 “Yet even...” から、終わりまで

です。各グループがこれらのうちの一つを担当することになります。初回ですので、ひとまず協力して準備する手順を確認しながらやってみてください。進行の予定上、発表していただくのは、第三回の授業の際になります。

コカコーラとアメリカ（1）

<授業のポイント>

今回から、配布した購読用資料を読み始めます。今回読む範囲は、第二次世界大戦の頃のお話です。短く区切りながら音読して、内容を確認しながら丁寧に読んでいきます。パラグラフ・リーディングの練習として、パラグラフの内容を要約する作業も行います。

1. 自己紹介

- ・授業の初めに自己紹介の時間を設けます。作成していただいた資料を提示しながら、簡単に経歴や趣味・特技などについてお話してください。
- ・発表者への質問等があれば、自己紹介の後をお願いします。

2. ウォール街発のデモについて

- ・前回の配布資料4に目を通します。
- ・授業の内容と関わりの深いトピックについて、配布資料に挙げたポイントを参考にしながらディスカッションします。

3. “Globalization in a Bottle”（購読用資料、資料1）

- ・購読用資料（pp. 250-255）をクラスで読みます。
- ・パラグラフの内容を簡潔にまとめる練習をします（資料1）。
- ・Google ドキュメントの Monday Class 1 を使って、講義録を作成します。（今回は講師が中心に作業します。ノート代わりに、自分用のドキュメントを作っておくと良いでしょう。）

4. 次回までにやっておくこと

- ・次回は“Globalization in a Bottle”の後半（おしまいまで）を読みます。一読して、質問やコメント、音読などができるように準備しておいてください。
- ・グループ・プレゼンテーションを行いますので、打ち合わせや資料の準備をお願いします。
- ・次回、次の購読用資料をお渡しします。

コカコーラとアメリカ（2）

<授業のポイント>

進行の予定としては、今週で最初の購読用資料“Globalization in a Bottle”を読み終わります。今回は資料の終わりのセクションについてグループで発表していただき、全体のまとめを行います。また、そろそろ個人プレゼンテーションと期末レポート作成の準備を始めたいと思いますので、ガイダンス用資料をお配りし、それを参考にプレゼンとレポートの構想を練っていただきます。

1. “Globalization in a Bottle”を読む（購読用資料）

- ・前回の続きから“Globalization in a Bottle”を読みます。ざっと流れと重要なトピックについて確認しつつ、英語表現についての疑問も解決していきます。

2. グループによるプレゼンテーション

- ・“Globalization in a Bottle” 263～265 ページ、“Globalization by the Bottle”のセクションを前後半に分け、それぞれについて各グループに解説していただきます。
- ・クラスで質疑応答を行い、講師による補足説明が必要であれば、それも行います。

3. 個人プレゼンテーション&期末レポート（資料1）

- ・終盤の授業で行う個人プレゼンテーションおよび期末レポートのためのアイデアをまとめていきます。簡単なガイダンスを**資料1**としてお配りしますので、ご参照ください。
- ・二週間後を目途に、プレゼンテーションのタイトル、テーマ、概要などを、講師までメールでお知らせください。

4. 購読用資料配布

- ・次に読む資料として、次の書籍からの抜粋をお配ります。

Michael Pollan, *In Defense of Food: An Eater's Manifesto* (New York: The Penguin Press, 2008)
(以後、授業ではこの資料のことを *In Defense of Food* と呼びます。)

- ・全体で 50 ページ近くあるので、全て授業中に読むことは出来ないと思います。

5. 次回までにやっておくこと

- ・購読用資料 *In Defense of Food* の 85～101 ページを一通り読み、質問やコメント、音読ができるように準備しておく。
- ・グループによるプレゼンテーションとして、“The Elephant in the Room”のセクションの一部を、各グループに解説していただきます。担当は以下の箇所。

1. 89 ページ “In the end, . . .” から 91 ページ “. . . by heart disease” まで

2. 91 ページ “In the years . . .” から 94 ページ “. . . more open to question” まで

今回の担当範囲は広いので、全部訳すのは大変だと思います。発表時間は長めに取っていただいて結構ですので、いろいろと工夫してみてください。

資料1 個人プレゼンテーション&期末レポート

初回の授業でも説明した通り、この科目では授業中に英語による個人プレゼンテーションを行っていただくことになっています。またそれを元にして、授業終了後に英文レポートを作成し、提出していただきます。この資料では、これらについての簡単なガイドラインを示します。

1. 何をやればいいのか？

基本的には何でも OK です。一応の決まりとしては...

- ・ 英語で調べて、英語で報告できるトピックであること
- ・ グローバリゼーションやメディア、あるいは異文化理解に関連のあるテーマ

が前提となりますが、テーマに関してはどのような関連があるかを説明できればよいので、出来るだけ自分の興味があることを選んだ方がよいでしょう。これまでの例としては...

- ・ 関連書籍、あるいは自分が読んで面白かった本について話す
- ・ 音楽、絵画、映画など、具体的な作品を取り上げて議論する
- ・ 特定の地域や文化について調べて、その結果を報告する
- ・ 自分の専門や仕事に関係のあることを調べてみる（よその国ではどうか）

といったものが多かったように思います。まずは「何について話すか」（トピック）を決めなければなりません。

2. プレゼンテーションはどのようにやるのか？

個人プレゼンテーションは、Power Point や Google ドキュメントなどで資料を提示しながら、口頭で説明をしていただくものとします。使用する言語は基本的に英語とし、質問やコメント、それに対する応答なども全て英語で行います。一人あたりの持ち時間は5～15分で、その後5分ほどの質疑応答を行います。

ほとんどの方がプレゼンの内容をもとに期末レポートを作成されます。ですからレポートを最終的な完成形として、授業中のプレゼンはその中間報告、概要説明と考えていただければ結構です。プレゼンテーションの段階では、特に次のような項目について話ができるように準備してください。

- ・ トピック——何についての話なのか
- ・ テーマ——そのトピックについてどのように話をするのか
- ・ リサーチの方向性——期末レポートまでにやっておきたいこと
- ・ 結論——最終的には何を明らかにしたいか

クラスメートや講師からのコメントや質問はレポート作成のための参考になりますので、プレゼンの内容と構成を工夫して、たくさんコメントをもらえるように頑張ってください。

3. レポートはどう書けばいいのか？

学术论文ではないので、細かい体裁は特に指定しません。次のような項目をしっかり盛り込むようにしてください。

- ・ タイトル——内容をうまく要約するタイトルをつける

- ・イントロダクション——何についてどんな話をするかを最初に書く
- ・論点——特に話をしたいポイントをいくつか決め、それを論じる
- ・ストーリーライン——読み物として楽しめるよう、話の流れを作る

良くない例としては、データや数字などが箇条書きになっているだけで、レポート全体の流れがつかみにくいものがあります。大切なのは、調べたことと自分の考えをを一つの物語にして読ませるということです。ワープロソフトなどで作成していただきますが、写真やハイパーリンクなども活用して、面白い読み物になるように工夫してください。希望があれば、講師による原稿チェックは可能な限り行うつもりですので、早めに準備に取りかかってください。

4. テーマの選定について

裏面に、プレゼンとレポート用のテーマ選定のためのガイダンスがありますので、参考にしてください。

<テーマの選定>

以下の手順は、既に扱いたいトピックが決まっている場合です。いくつか候補があって迷っているような場合は、講師の方までご相談ください。何かしらのアドバイスはできると思います。

STEP 1: リストアップ

まず大きなトピックを仮に決めておきます。

大きめの紙の中心にそのテーマを書きます。

周りの余白に、テーマに関連のありそうなことを思いつくままにメモします。

※この段階ではあまり深く考えずに、思いついたことを全て書き出すようにします。

STEP 2: 関連付けとグループ分け

リストができたら、メモした項目のうち関係のありそうなものを線で結びます。

たくさん項目がひとつに結びついたら、それを1グループとします。

大きなグループが3～5くらいできるようにします。

別の紙に、グループごとに項目をまとめて書き写し、グループごとに見出しをつけます。

STEP 3: 全体テーマの選定

各グループの見出しを見て、それらに共通するものは何か、またそれらの中にどのような話のつながりがあるかを考えます。

共通点や話のつながりも後ほど役に立つので、忘れないようにメモしておきます。

見出しを並べ替えて、話の流れを作っていきます。頭の中でやるだけでなく、書き出したりタイプしたりして記録が残るようにしましょう。

全体の流れが見えてきたら、いよいよ全体テーマを決めます。「この話の流れでいけば、こういう結論になりそうだ」というあたりをつけて、その結論（あるいは自分の言いたいこと）を1センテンスで書いてみましょう。

STEP 4: トピックセンテンスの作成

これまでに作成してきたものが、プレゼン原稿とレポートのための下書きとなります。

「何についてどのような話をするか」「それをどのような流れで説明するか」を、1～2センテンスに凝縮して書いてみましょう。これをトピックセンテンス (Topic sentence) と言います。

トピックセンテンスは、自分が原稿を書く際に絶えず参照するガイドラインとなります。そこから話が脱線しないように、上手に話を進めていくようにするとよいでしょう。

以上がテーマの選定から原稿の書き始めまでの流れです。必ずしもこれに従う必要はありませんが、行き当たりばったりに書き始めるよりは、最初にしっかり計画を立てておくほうが楽です。

いずれにしても、まずはトピックセンテンスを作る必要があります。これはレポートを書く時までにとまどまどしていれば良いので、プレゼンテーションはあくまで、作成途中のトピックセンテンスについて報告し、クラスメートのコメントやアドバイスをもらうための場とお考えください。

※以上のことを参考に、だいたいのところ結構ですので、「何について」「どのような」話をする予定であるかを、二週間後の授業の時までに講師にメールでお知らせください。

西洋型の食生活（1）

<授業のポイント>

今回から、新たにお配りした購読用資料を読み始めます。ただしその前に、最初の購読用資料の残りも読んで、内容や英語について確認しておきます。またコカコーラについての補足資料をお配りしますので、それについても議論できればと思います。

1. “Globalization in a Bottle” （購読用資料）

- “Globalization in a Bottle” のまだ読んでいない部分、“Cold War, Cola War” と “Coca-Cola in the Middle East” (pp. 256-263) を読みます。パラグラフごとに内容と英語表現を確認しますので、コメントや質問をお願いします。
- “Globalization in a Bottle” の記事全体についてまとめを行います。

2. 補足資料——アラブとコカコーラ （資料1）

- Don DeLillo の小説 *Mao II* からの抜粋を読みます。まず全体を読み、その後で議論に移ります。
- メディアやグローバリゼーションとの関係で、テキストを読んでみましょう。

3. *In Defense of Food* （購読用資料、資料2）

- *In Defense of Food* の記事を読んでいきます。今回読むのは “The Aborigines in All of Us” のセクション (pp. 85-89) です。
- **資料2** として語句解説と議論のポイントをお渡ししますので、それも使いながら、内容と英語について確認してきます。

4. グループによるプレゼンテーション

- *In Defense of Food* の “The Elephant in the Room” のセクション冒頭を、グループごとにまとめて解説していただきます。
- 時間がなければ、上記3と入れ替えて先に行います。また、まだ準備が整っていなければ次回に行います。

5. 次回までにやっておくこと

- *In Defense of Food* の “The Elephant in the Room” の残りの部分（101 ページまで）を読んでおいてください。
- 個人プレゼンテーションの日時を決めますので、希望する日を連絡してください。まだテーマやトピックが決まっていない方は、早めに決定してお知らせください。
- グループによるプレゼンテーション——今回は *In Defense of Food* の “The Industrialization of Eating: What We Do Know” のセクション冒頭を担当していただきます。

- | |
|--|
| <ol style="list-style-type: none">1. p. 102 “What would happen . . .” から p. 104 “the Western diet” まで2. p. 104 “Note that these . . .” から p. 106 “hunting and gathering” まで |
|--|

西洋型の食生活（2）

<授業のポイント>

今回は主に購読用資料 *In Defense of Food* を読み進めていきます。「食の industrialization」とは何かという核心の部分に入る前に、何が問題とされているのかをしっかりと確認しておきましょう。またグループによるプレゼンテーションと前後し、ケーススタディーとしてドキュメンタリー映画を観てみましょう。

1. アラブとコココーラ（前回分資料1）

- ・前回配布した資料1を読み、アラブ世界とコココーラのイメージの関わりについて考えます。

2. *In Defense of Food*（購読用資料、前回分資料2、資料1）

- ・購読用資料から“The Aborigines in All of Us”のセクション（pp. 85-89）を読みます。前回配布資料2もあわせて用いながら、内容と英語を確認してみましょう。
- ・購読用資料の“The Elephant in the Room”のセクションを読み進めます。前回グループで発表していただいた部分についての補足説明をした後で、続きの部分を読んでいきます（資料1）。

3. ケーススタディー（資料2）

- ・ドキュメンタリー映画『フード・インク』（*Food, Inc.* 2008年、アメリカ映画、Robert Kenner 監督）を観ます。アメリカの話が主ですが、「食の industrialization」について具体的な説明がされています。
- ・今回は冒頭の30分ほどのところを観ます。鑑賞後に、クラスでディスカッションを行います。鑑賞のポイントや作品解説については、資料2を参照してください。

4. グループによるプレゼンテーション

- ・*In Defense of Food*の“The Industrialization of Eating”冒頭（pp. 102-106）について、グループごとに解説をしていただきます。

5. 次回までにやっておくこと

- ・*In Defense of Food*の残りの部分を読み進めてください。ここからは「食の industrialization」の詳細が項目ごとに説明されますので、項目ごとにポイントを押さえるように気を付けながら読んでみてください。
- ・グループによるプレゼンテーション——最後のグループ・プレゼンテーションは、これまでとは趣向を変え、ここまでに読んできた資料全体について、あるいはそれに関連する項目についての意見をまとめて報告していただきます。適宜本文からの引用を入れるという以外にルールはありませんので、自由にご発表ください。プレゼンは第7週目を予定。

資料2 ケーススタディー

<作品解説——『フード・インク』について>

『フード・インク』（原題：*Food, Inc.*）は、ドキュメンタリー映画での受賞歴もある Robert Kenner 監督による 2008 年のアメリカ映画。アメリカの食糧生産と加工流通は、少数の大企業によって集権的に管理され、アメリカ人の食卓に並ぶ食物は、工業製品のように大量生産されている。『フード・インク』はこの現状を批判的に捉え、“industrialized”なものとなった食品がアメリカ人の健康を損ない、環境や社会そのものにも悪影響を及ぼしていることを警告する。映画では工業化した食糧生産・加工・流通の実情と問題点が分かりやすく解説され、またそうした状況を打破するための様々な試みが紹介されている。

映画のナレーションを担当し、インタビューにも登場するのは、*In Defense of Food*の著者 Michael Pollan と、ドキュドrama(ドキュメンタリー風のドラマ)として映画化(2006年)された *Fast Food Nation* (2001年)の著者 Eric Schlosser である。Pollan は映画の監修も務めており、彼の論点をビジュアルに捉えるうえでも非常に参考になる映画である。

<鑑賞のポイント>

『フード・インク』はアメリカの食の問題を中心的に扱っているが、食糧生産・流通・消費がグローバルなものとなり、狂牛病や O-157、鳥インフルエンザなどの世界的な流行、海外でも多発する商品ラベルの不正表示などの問題がメディアを賑わす昨今、日本にいてもこれは対岸の火事として片づけられる問題ではない。これは異文化の問題でもあり自分たちの問題でもあるという意識を持って、映画を観ていただきたい。購読用資料との関連では、食の“industrialization”とは具体的にどのようなものなのかを、映画を通して確認しておきたい。次週以降は映画の後半部分からいくつかのチャプターを観て、問題解決のために何ができるのかを考えてみたい。

<個人プレゼンテーション&レポート作成のために>

個人プレゼンテーションとレポートのためには、文献資料だけでなく、映像作品なども参考にしてみてはいかがでしょうか。ここ 10 年ほど、食の問題（とグローバリゼーションの関係）を扱った映画が数多く制作され、日本でも上映されています。いくつか例を挙げておきますので、気になる方はチェックしてみてください。

『ファーストフード・ネーション』——アメリカのファーストフード業界の舞台裏、不法移民問題

『ありあまるごちそう』——世界から飢えがなくなるのはなぜか（ヨーロッパの話が主）

『キング・コーン 世界を作る魔法の一粒』——あらゆる食品の元になるコーンについて調べた、突撃体験型ドキュメンタリー（二人の若者が実際にコーンを栽培する）

『いのちの食べ方』——ナレーションを一切入れずに、食糧生産の現場の様子をひたすら映し出す

『ダーウィンの悪夢』——白身魚として日本を含む世界各地で消費される、アフリカ産のナイルバーチという魚から見えてくる悲惨な現実

『スーパー・サイズ・ミー』——一か月間マクドナルドだけを食べるとどうになってしまうのか、体を張って実験

西洋型の食生活（3）

<授業のポイント>

前回、前々回に引き続き、*In Defense of Food*の読解を中心に進めていきます。今回はグループによるプレゼンテーションも行います。質問やコメントが活発に行き交うことを期待しています。

1. *In Defense of Food*（前回分資料1）

- ・購読用資料 *In Defense of Food* の“The Elephant in the Room”のセクションの残り（p. 95、“Although... からおしまいで）を読んでいきます。前回配布した資料1の解説も参照しながら、英語と内容を確認しましょう。

2. グループによるプレゼンテーション

- ・購読用資料 *In Defense of Food* の“The Industrialization of Eating: What We Do Know”の冒頭を二つに分け、グループごとに英語と内容についての解説をしていただきます。
- ・個人プレゼンテーションの練習も兼ねて、特に質問やコメントが出ない場合も、指名して半強制的に何か発言していただくようにします。発表を良く聞いておくようにしてください。
- ・ひと通りディスカッションをした後で、講師から質問したり、補足解説をしたりします。

3. 生物多様性その他（資料1）

- ・食と西洋文明の関係をより大きな視野で考える手がかりとして、資料1に挙げた日本語の記事を参照します。
- ・生物多様性（bio-diversity）は近年ホットな話題となっています。それがなぜ重要なのか、そしてグローバル化した世界で生きていくうえでそこから何を学ぶことができるのかを考えます。
- ・別の記事を参照し、「時間環境」についてさらに考えを深めます。

4. ケーススタディー

- ・前回冒頭部分を観た映画『フード・インク』の他の箇所を観ます。

5. 次回までにやっておくこと

- ・**最終グループ・プレゼンテーション**——前回指示したとおり、最後のグループによるプレゼンテーションでは、これまでの授業の内容についてまとめて、報告していただきます。今回お渡しした資料も参考にしつつ、特に興味深かったトピックや論点についてお話してください。
- ・***In Defense of Food*を読み進めておく**——残りの授業の中では、時間が許す限り購読用資料を読み進めていきますので、残りの部分にも目を通しておいてください。
- ・**個人プレゼンテーションの準備**——いよいよ次回から個人プレゼンテーションを行います。まだ発表予定日をお知らせいただいていない方は、早急にご連絡ください。また資料作成などで講師のアドバイスが必要な方は、メールでご連絡ください。また、英語による質疑応答を行いますので、ご自分の発表以外でも何か発言できるように、心構えをしておいてください。

資料1 生物多様性その他

出典：本川達雄『生物学的文明論』新潮新書、2011年（引用文の下線はすべて引用者による）

生態系は自分自身の一部

そもそもお金というものは、次のような発想の下に成り立っているものです。この鉛筆だって、ノートだって、消しゴムだって、皆、違うものです。質が違います。だからノートで消しゴムの代わりはできません。それぞれ、かけがえのないものです。

でもそう考えてしまうと、簡単には交換ができない。そこで、本当は皆、質が違うかもしれないが、一応、質的には同じだとみなしてしまおう。そして違いは量だけなんだと考えてしまいます。そうして、それぞれに値札という質を示す札を貼っていく。すると交換できるようになる。これが貨幣経済です。質を量に変換するのが貨幣経済。

これはとても便利な考え方ですが、この考えがあまりに行きすぎると、お金さえ出せば、何でも買えると思うようになりがちです。

かけがえのなさは、お金では評価できないのですね。個々の生物の種は、それぞれが長い進化の歴史をもった、かけがえのないものです。交換はききません。お金を出しても買えません。こういうかけがえのないものに価値を置くという発想がないと、多様な生物それぞれを大事にする発想は出てこないでしょう。

生物多様性という言葉には、「多い」という形容詞が入っていますから、多いことがいいことなんだ、だったらどれだけの多さが必要なのか、どれだけ減少したら問題になるのかと、量の問題としてとらえたいかもしれませんが、そうではなく、多様だということは、それぞれの生物がかけがえがない、質がみな違うのだと、質の問題としてとらえるべきだと思います。

生態系とは、かけがえのない生物たちが、互いに関係を持ち合って、複雑にからみあったシステムをつくっているものです。だからこうしてできた生態系も、もちろんかけがえのないものです。そして、さまざまな生物が関係し合って、地球の生物圏ができており、その中で私たち人間も生きている。地球の生物圏は、かけがえのないものです。お金を出せば代わりがあるというものではありません。

生物多様性を大切にする発想として、もう一つ忘れてはいけないものがあります。多様な生物たちとつながっていなければ、人間は生きていけない、だから多様な生物を大切にしよう、という発想です。そもそも生物というものは、単独では生きていきません。

今、大変な速度で生物が絶滅していっているのですが、その多くは、私たちが直接その生物を殺しているわけではありません。その生物が棲んでいる生態系を破壊してしまうから、結局、生物たちが死に絶えていくのです。生態系を破壊するとは、物理的環境の破壊も意味するだろうし、他の生物たちとのつながりの破壊も意味するでしょう。

自分の暮らしている生態系がなくなったら、自分自身もなくなるとすれば、ある意味では、生態系は自分の一部だと言ってもいいと私は思います。いろいろな生き物とつながりをもっている、そのつながりそのものも、自分だと考えてもいいのではないでしょうか。こう考えると、生態系を大事にするとは、自分を大切にすることになります。(64-66)

生物多様性と南北問題

生物多様性の保全。これは、じつに困難な課題です。なぜなら、西洋近代が作り上げてきた今の世界の矛盾が、ここに象徴的に出ている問題だからです。

矛盾の第一として、南北問題があげられるでしょう。生物多様性を守るといって、一番多様性の高いのは熱帯雨林とサンゴ礁で、どちらも熱帯、つまり南の貧しい国です。自然を開発して、何とか経済的に豊かになろうという南の国の希望を、生物多様性が減少するからダメだと、頭から押さえ込むわけにはいきません。南の国の人たちには生活がかかっています。それに対して、北の国の人たちは、そもそも都会暮らしで、生物多様性の減少など、それほど身につまされる話ではなく、開発をあきらめてもらう代償として南の国にお金を支払ってまでも、地球の生物多様性を守ろうという気持ちには、なかなかなれません。

南北問題のもう一つの側面が、生物多様性条約で問題にされています。この条約の目的として、遺伝資源の利用から生じる利益を公正に配分するという項目があります。新しい薬が、めずらしい生物から作られたとしましょう。作るのは北の国、珍しい生物が棲んでいるのは南の国と、相場が決まっています。その新薬からあがった利益は、製薬会社が独占せずに、生物の提供国である南の国にも分けようというのが、生物多様性条約の目的の一つです。これにアメリカが納得せず、まだこの条約を承認していません。(66-68)

豊かさの転換

生物多様性の背後にある、別の問題点も指摘しておきましょう。科学や技術は、今の世の中を作り上げるのに絶大な力をもっています。この科学や技術が前提としている思想に問題があると私は思うのですね。

先ほど質と量という話をしましたが、科学は基本的に質を扱わないものです。量だけで考える。すると数式が使えて、きわめて客観的にみえる学問にかかっていきます。理科系だけではなく、経済学もそうです。

すべてのものは同じ質であり、違いは多いか少ないかだけ。つまり価値を測るものさしは、ただ一本。すると、量の多い方がより豊かだ、より良いのだ、という価値観になりやすいのですね。だから、より幸せにと思えば、どんどん量を増やす。そして地球の資源や生物多様性を食いつぶすことによって量を増やしているのが現実です。量だけで価値判断するやり方を、このあたりで卒業しないと地球がもちません。これからの私たちの暮らしは、より量を減らす方向に向かわざるを得ません。

量を減らせば貧乏になってしまうと、どうしても私たちは考えがちで、だからこそ、これだけ環境問題・資源の枯渇が叫ばれても、量を減らせないのです。でも、量の減少、即、貧乏とは、私は必ずしも思っていません。そう思う理由一。ここで、サンゴ礁のことを思い出して下さい。熱帯の貧栄養の海を、多様な生物にあふれた豊かな海にサンゴ礁は変えていました。サンゴと褐虫藻の共生と、その間の資源のリサイクルにより、乏しい環境でも、きわめて豊かに暮らせるようになってるのがサンゴ礁。共生とリサイクルが貧しいものを豊かに変える手立てだというのは、きわめて示唆的です。

もう一つの理由。「量が多い＝豊か」という今の生活が続けられなくなっても、みじめと感じなくてもよい方法があるのです。量から質へ、豊かさのとらえ方を変えればいいのです。

多様だ、というのは質がいろいろあるということです。量はほどほどでいいから、質の違ったものが

いろいろあることが豊かなのだと、豊かさの定義を変えればいい。生物多様性を大切にすると、多様とは豊かなこと、だから大切にするのだという発想に基づいて、生物多様性も議論されるべきだと私は思っています。(68-69)

歴史あるものを大切に

科学的発想の問題点はまだまだあります。

科学は普遍性を大切にします。いつでもどこでも何にでもあてはまる法則、それが科学では重要なのです。ところが生物は個別主義でご当地主義です。異なる環境ごとにそれに適応した異なる種がいます。そしてそういう種は、進化の長い歴史の産物なのであり、歴史には偶然がからんできます。だから多様な生物はそれぞれが特殊なのであって、普遍性を大切に科学の目から見ると、そんな物は重要性が低いと思われがちなのですね。

でも、かけがえがないとは特殊だということです。長い歴史をもった特殊なもの、そういうものに価値があるのだという発想が、生物多様性を大切にする根底にあるべきです。

これをサンゴ礁に引きつけて言えば、進化という歴史の中で、独特のものが形づくられて来たのが今、私たちが目にしているサンゴ礁の多様な生物たちなのであり、これは価値あるものとして大切にすべきです。そして、南の島には独特の文化があり、それを育んできたのがサンゴ礁です。生物も文化も、歴史をもつ独特のものは、それだけで価値ありとすべきです。

科学について、さらに一言。科学は、世界を単純化して眺めるものです。世界の構成要素も単純化し、要素間の関係も単純化します。科学が質を問わないのは、構成要素を単純化するためです。

ところが生態系は、質の異なる非常に多くの生物たちが相互に複雑な関係を結んでできあがっているものです。これは科学が苦手とする相手なのですね。なにせ単純な量に換算して数学的に処理することが困難です。(……) (70-71)

時間を環境問題としてとらえる

時間というものは、私たちがその中で生きている環境と言ってもいいものです。環境は、いつも変わらず安定していてこそ、その中で安心して生きていけます。ところが今や時間環境が、どんどん速くなっているのです。ドッグイヤーなんていう言葉もありましたね。

日本国民の半数近くが、社会生活のテンポが速すぎると感じています。ヒトという生きものにとって適切な時間環境があるからこそ、そういう感覚をもつのでしょうか。でも、より便利に、より速くと、どんどん時間が加速しているのが現状です。これは時間環境が破壊されていると言えるのではないのでしょうか。

今まで、環境問題というと、温暖化や、化学物質による環境汚染が問題にされてきました。時間が環境問題としてとり上げられることはありません。時間は変わらないというのが常識ですから、時間環境という問題の立て方はあり得ないからです。

ここは盲点なのですね。地球温暖化も資源エネルギーの枯渇も、元はといえば、じゃんじゃん石油を燃やして時間を速めているのが原因です。

時間をもう少しゆっくりにして、社会の時間が体の時間と、それほどかけ離れたものではないようにする。そうやって時間環境問題を解決すれば、自動的に温暖化もエネルギー枯渇の問題も、解決してし

まいります。

時間の問題から、エネルギー問題をはじめとする、他の多くの環境問題も派生しているのです。だから時間環境は、環境問題の中で、もっとも重要なものとして取り扱われるべきものなのですね。そういう問題があることにすら気づかせない現代の時間観は、非常に問題の多いものだと思います。(194-196)

<解説>

「生態系とは、かけがえのない生物たちが、互いに関係を持ち合って、複雑にからみあったシステムをつくっているもの」あるいは「生態系は、質の異なる非常に多くの生物たちが相互に複雑な関係を結んでできあがっているもの」とあるように、生物多様性の問題からは、グローバリゼーションについての重要な論点が浮かび上がります。授業のキーワードとして提示した“interconnectedness”とは、まさにこの「相互に複雑な関係を結んでできあがっている」システムの在り方に他なりません。興味深いのは、グローバルな世界のシステムでは個々の構成要素の独自性が失われ、世界が平板で (flat) 均質な (homogeneous) ものになるということが言われる一方で、生物多様性の視点から見れば、それらの構成要素のかけがえのなさ (irreplaceability) こそがますます重要になるということです。

購読用資料 *In Defense of Food* との関連では、「科学は、世界を単純化して眺める」という点が注目に値します。つまり “reductionist” 「還元主義的」な科学としての nutritionism もまた、同様に一種の環境問題として考えることができそうです。また食べ物の「質」を犠牲にして「量」を増やすことで豊かな文明を維持しようとする傾向も、西洋型の食生活の問題点の一つとすることができます。どのようなタイプの食生活や食文化、あるいは食物にも、長い歴史や進化の過程で培われてきた特殊性があります。アメリカを例にして映画『フード・インク』でも確認したように、西洋文化における食のあり方は、こうした特殊性を無視して、工業製品のように大量に均質化された食品を生み出すものです。

グローバリゼーションについて考えるにあたっては、それを概念として理解することも重要ではありますが、例えば食べ物というような自分にとっても身近な物事を通して、それが何であるかを考えることがより重要です。今回の資料で話題となっている「かけがえのなさ」、「質の異なるもの」という発想は、非常に参考になるかと思えます。西洋式の考えでは “more” や “bigger” が良しとされる場所がありますが、“different” であることの大切さも最近では盛んに言われるようになりました。いくつか例を挙げると、ある意味でグローバリゼーションの象徴でもあるアップル社が、1997年に打ち出した広告のスローガンは、ほかでもない “Think Different” でした。あるいは「世界に一つだけの花」がヒットしたのも、“different” であることは良いことだという考えが、多くの日本人に共有されるようになったからでしょう。

最近ではこうした傾向を批判的に捉えた、“difference” 「差異」や “diversity” 「多様性」といった発想そのものが最も売れる商品になっているという意見も聞かれます。例えば栄養補助食品であれば、ひとりひとりのニーズに合わせて、様々な種類から選ぶことができるとか、日本人なのにアメリカの黒人音楽を好み、それに影響を受けて皆がラップを始めたりなど、違いそのものや選択肢の多さそのものが、お金を生む商品となるわけです。政治的公正 “political correctness” といったものもあり、様々な違いがあることを積極的に認め評価しようとする傾向が世界的に広がっており、そのこと自体は良いことだと言えます。ただし違いがあるということが当たり前だと思いついてしまうと、「問題があることにすら気づかせない」ことが、まさに問題なのだということが、分らないままになってしまいます。このポイ

ントも、*In Defense of Food*にあった「部屋の中の象」の話と関連しています。グローバリゼーションを通して異文化理解を試みるというのは、単に他の文化はこんなところが違っているという話をするのではなく、大きなシステムとしての世界の中における個々の文化のかけがえのなさを、あらためて考え直すことなのです。

<時間環境についての補足>

上の引用文献のところで話題になった「時間環境」について、別の資料を参照しておきます。

出典：福岡伸一『できそこないの男たち』光文社新書、2008年（下線はすべて引用者による）

魚は水の中で一生を過ごす。水中で生まれ、四六時中水中で過ごし、水中で死ぬ。魚たちはおそらく、自分が、水という極めて重く、粘度の高い流体の中で生きていることに全く気づいていない。魚たちは自分たちを取り囲み、自分たちを載せている「媒体」の存在を認識できないのだ。

魚が水の存在に気づけないように、走行する新幹線の中のカラカネハナカミキリは、彼を浸し、彼の飛翔を支える媒体、つまり空気の分子の存在とその運動を知らない。

私たち人間もまた常に何らかの媒体に取り囲まれ、それに載せられて生きているにもかかわらず、その存在を感じる事ができない。私たちにとっての媒体とは一体なんだろう。

(……)

私たちにとっての媒体とは何か。それは、時間である、と私は思う。時間の流れとは私たち生命の流れであり、生命の流れとは、動的な平衡状態を出入りする分子の流れである。つまり時間とは生命そのもののことである。生命の律動が時間を作り出しているにもかかわらず、私たちは時間の実在を知覚することができない。

いや、むしろこういうべきだろう。生命は時間という名の媒体の中にどっぷりと浸されているがゆえに、私たちはふだん自分が生きていることを実感できないのである。ならば、時間の存在を実感できる一瞬だけ、私たちは私たちが運ぶ媒体の動きを知り、私たち自身が動いていること、つまり生きていることを知覚しうるのではないだろうか。(273-275)

人はなぜジェットコースターに熱狂するのだろうか。それは似ているからだ、と私は思う。ジェットコースターが落下するとき、人間の体が受け取る感覚。蟻の門渡りあたりから始まり、そのまま尿道と輸精管を突き抜け、身体を中心線に沿ってまっすぐに急上昇してくる感覚。

この時人間は何を感じているのだろうか。加速度である。重力がぐんぐん私たちを引きずり込む加速度。それを私たちは身体の深部で受け止める。

(……)

ではなぜ加速度は快感なのだろうか。ここに「媒体」という問題が交差する。

私たちは媒体の中に浸されて、媒体とともに動く。(……) 無視は自分が時速 200 キロで運ばれていることを知らない。魚は水の存在に気づかない。なぜか。彼らが巡航しているからである。彼らが等速度運動をしているからである。媒体に包まれているものが、媒体と同じ速度で動いているとき、媒体の存在を知るすべはない。

(……)

時間の存在を、時間の流れを知るたったひとつの行為がある。時間を追い越せばよい。巡航する時間を一瞬でも、追い越すことができれば、その瞬間、私たちは時間の存在を知ることができる。時間の風圧を感じることができる。それが加速度に他ならない。

巡航する時間を追い越すための速度の増加、それが加速度である。加速されたとき初めて私たちは時間の存在を感じる。そしてそれは最上の快感なのだ。なぜならそれが最も直截的な生の実感に他ならないから。

自然は、加速度を感じる知覚、加速覚を生物に与えた。進化とは、言葉のほんとうの意味において、生存の連鎖ということである。生殖行為と快感が結びついたのは進化の必然である。そして、きわめてありていにいえば、できそこないの生き物である男たちの唯一の生の報償として、射精感が加速覚と結合することが選ばれたのである。(280-283)

<解説>

生物は本来メスが基本で、オスはメスの劣化版、「できそこない」であるということを論じた、生物学の解説書から引用しました。五感とは別に、生物には加速を感じ取る「加速覚」があると仮定し、それを生殖行為や進化と結びつけて論じてあります。ジョークのように聞こえますが、筆者は大真面目に話をしています。

授業テーマとの関連では、加速 (acceleration) という話題がまず目を引きます。グローバリゼーションの特徴の一つとして、物事のスピードが速くなるのみならず、そのように加速する変化のスピード自体がだんだん速くなっていくということがあります。それに慣れてしまい、例えばコンピュータの処理速度や通信速度が年々早くなるのは当然だと考えるようになると、変化していることに気づきにくくなります。生物多様性のところでも見たとおり、速ければ速いほど良いという思い込みをいったん捨てて、一步引いて状況を眺めてみるのが大切です。それもある意味では、巡航する時間を追い越すことであるはずで。

もう一点注目したいのは、「媒体」のことです。「媒体」は英語では“medium”で、その複数形が“media”です。メディアと聞くとマスメディアやDVDなどの記録用メディアを思い浮かべますが、考えてみれば、私たちが生きている環境それ自体も一種のメディアだと言えます。ですから、メディアについて考えるということは、普段生きていく中で当たり前とみなしているもの、当たり前すぎてわざわざ話題にすることもないもの(「部屋の中の象」)について、あらためて着目してみるということなのです。この授業をとおして私たちが学んだことの一つは、まさに「当たり前ものを当たり前と考えない」という姿勢の大切さだと言えます。それは食生活と健康についても、生物多様性についても当てはまることですし、グローバリゼーションやメディアの研究にとっても重要な教訓です。わざわざ英語を勉強して、それを使って異文化理解を試みるのも、英語という「媒体」にあらためて注目し、その「媒体」から見えてくる様々なものをより良く理解するために他なりません。

最後は説教臭くなりましたが、授業でやったことをもう一度客観的に見直して、自分なりの問題意識と結びつけていただければ幸いです。

授業のまとめ

<授業のポイント>

今回は、既に配布した資料などを用いて、ここまで授業で行ってきたことをまとめます。

1. 生物多様性その他（前回配布分資料1）

- ・前回の授業でお配りした資料1の続きを読みます。

2. グループによるプレゼンテーション

- ・グループによる最終プレゼンテーションとして、ここまでの授業内容についてまとめたものを報告していただきます。
- ・コメントや質問などがあれば、発表の後にお願いいたします。

3. In Defense of Food（購読用資料、資料1）

- ・前回のグループ・プレゼンテーションで解説していただいた箇所について、資料1の補足説明を読んでおきます。授業全体についてのまとめも盛り込んでありますので、参考にしてください。
- ・時間があれば、購読用資料の続きを読んでもみます。

4. ケーススタディー

- ・『フード・インク』の他の箇所を観ます。

5. 個人プレゼンテーション

- ・個人プレゼンテーションを行います。今週はお二人の発表を予定しています。
- ・発表後に、英語による質疑応答を行います。デタラメな英語でも構いませんので、何か発言してみてください。

6. 今後の予定

- ・**個人プレゼンテーション**——次週は最終回で、90分の授業となります。個人プレゼンテーションだけで終わると思いますので、出来るだけ発表時間が短くなるように（5分以内）準備してください。また使用する資料はあらかじめ講師まで送っていただくか、Google ドキュメントであれば共有設定をしておいてください。おそらく質疑応答にはほとんど時間が取れませんので、授業終了後に直接お話ししていただければと思います。
- ・**期末レポート作成**——個人プレゼンテーションをもとにして（あるいは全く別の内容でも構いませんが）、英文の期末レポートを作成してください。ワードなどで作成していただいても良いですし、Google ドキュメントで作成して共有するというのも大丈夫です。印刷したものではなく、電子ファイルとして提出してください。提出期限は、 月 日とします。あくまで目安ですが、授業の記憶が新しいうちに書いてしまった方がいいと思います。正式な提出前に英文チェックが必要な方は、提出期限より前にメールでご連絡ください。その他不明な点がございましたら、同じく講師までお問い合わせください。